広島大学大学院教育学研究科紀要　第二部　第57号　2008　317－323

体育授業におけるPISA型「読解力」の育成に関する検討

諾日布　斯　仁

（2008年10月２日受理）

Basic Research on PISA Type Comprehension Power in Physical Education

Nuoribusiren

Abstract: It was the purpose that this research works on the trend of the physical education towards training of PISA type reading comprehension power in the physical education and a concrete policy. The result is summarized into the following three points. 1) About a physical education lesson, the tendency focalized should ask the lesson practice which aimed at two targets called "the capability which expresses briefly what himself felt" and "training of the capability suitable for various texts to read". 2) In the physical education practice to which aimed at "the capability suitable for the subject to read" of "capability understood and interpreted according to purpose" and "capability read while evaluating" is seldom seen. The raining of PISA type reading comprehension power may be difficult. 3) Be in the tendency that reading of a "physical education text" or entry of "a study card and a study note" has taken the lead, in each practice. When a physical education lesson also raises PISA type reading comprehension power, it is suggested that entry of "a study card, a study note", etc. is an effective means. However, the creation of the evaluation standard of the contents of description and the examination of a rule rucksack (grading indicator) corresponding to this are indispensable.

Key words: PISA type reading ability, "study card note", "problem solution study", "valuation basis"
キーワード：PISA型「読解力」,「学習カード・ノート」,「課題解決学習」,「評価基準」

1．はじめに

1.1. 背　景

2003年７月にOECD（経済協力開発機構）が実施したPISA調査（Program for International Student Assessment；生徒の学習到達度調査）の結果において日本の「読解力（Reading Literacy)」の得点がOECDの平均値程度まで低下していることが問題として指摘された（国立教育政策研究所，2004)。

このような状況の中，2005年に文部科学省は，「読解力向上プログラム」を公表した（文部科学省，2005a)。その中においてPISA型「読解力」は，「自ら目標を達成し，自らの知識と可能性を達成させ，効果的に社会に参加するために，書かれたテキストを理解し，利用し，熟考する能力」と定義されている（文部科学省，2005a)。そして，PISA型「読解力」は，義務教育終了段階にある生徒が，文章のような「連続型テキスト」及び図表のような「非連続型テキスト」を幅広く読み，これらを広く学校内外の様々な状況に

本論文は，課程博士候補論文を構成する論文の一部として，以下の審査委員により審査を受けた。
審査委員：松岡重信（主任指導教員)，角屋重樹，池野範男

関連付けて使えることを実践課題に位置づけた。生徒達が，連続型テキストや非連続型テキストを組み立て，展開し，意味を理解することをどの程度行えるかについて，可能な限り客観的にみることをねらいとしている。このため，PISA 型「読解力」の問題では，行為のプロセスとして，テキストの中の事実を切り取り，言語化・図式化する「情報の取り出し」だけではなく，書かれた情報から推論・比較して意味を理解する「テキストの解釈」，書かれた情報を自らの知識や経験に位置づけて理解・評価（批判・仮定）する「熟考・評価」の３つの観点を設定している。

すなわち，PISA 型「読解力」とは，文章や資料から「情報を取り出す」ことに加えて，「解釈」「熟考・評価」「論述」することを含むものであり，以下のような特徴を有しているといえる。

①テキストに書かれた「情報の取り出し」だけはなく，「理解・評価」（解釈・熟考）も含んでいること。
②テキストを単に「読む」だけではなく，テキストを利用したり，テキストに基づいて自分の意見を論じたりするなどの「活用」も含んでいること。
③テキストの「内容」だけではなく，構造・形式や表現法も，評価すべき対象となること。
④テキストには，文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけでなく，図，グラフ，表などの「非連続型テキスト」を含んでいること。

しかしながら，ここでいう PISA の「読解力」と国語教育等で従来から用いられてきた「読解」ないし「読解力」という語の意味するところと大きく異なるようである（文部科学省，2005b）。

他方，PISA 調査から判明した学校教育全体の課題を，小森茂（2008）は次のように指摘している。「我が国の子どもは，『テキストの解釈』『熟考・評価』とりわけ『自由記述（論述）』の問題を苦手としていることが明らかになった。この結果は，PISA 型『読解力』の課題が『読む力』にとどまらず，『書く力』や，特に『考える力』と関連している」。

この説明から理解できるように，PISA 型「読解力」は日本の読解力の通常のイメージに加え，テキストを「解釈」したり，「熟考」したりすること，あるいはテキストを利用すること，テキストに基づいて自分の意見を論じること，テキストの構造・形式，表現法を評価すること，図，グラフ，表など読解の対象とすることも包括した概念であると考える。したがって，PISA 型「読解力」は，日本の国語科だけでは十分に対応できないのが現状であり，「調査問題のテキストの種類や実際の設問等から見ても，あらゆる教科等にまたがる取組が必要である」（田中孝一，2006）。なお，本研究においても，単に「読解力」とはせずに，PISA 型「読解力」と表記することとした。

1.2. 問題の所在

では，体育科における PISA 型「読解力」の育成については，どのような取組やその課題が求められているのだろうか。

平成20年７月の『中学校学習指導要領解説保健体育編』第１章総説の「改訂の経緯」では，「思考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式問題，知識・技能を活用する問題」が提示されている。また，思考力・判断力・表現力等を育むために「観察・実験，レポートの作成，論述など知識・技能の活用を図る学習活動を発達の段階に応じて充実させるとともに，これらの学習活動の基盤となる言語に関する能力の育成のために，（中略），各教科等において，記録，要約，説明，論述といった学習活動に取り組む必要がある」と指摘している。

保健体育科における体育については，「体を動かすことが，身体能力を身に付けるとともに，情緒面や知的な発達を促し，集団的活動や身体表現などを通じてコミュニケーション能力を育成することや，筋道を立てて練習や作戦を考え，改善の方法などを互いに話し合う活動などを通じて論理的思考力をはぐくむことにも資すること」と述べられている。すなわち，体育科としては，従来の指導内容の１つである「学び方」を「知識，思考・判断」に変更し，課題解決の学習，「学習カード・ノート」やテキストの利用など，体育科での PISA 型「読解力」向上の方向性と可能性を示していると考えられる。

しかし，渡邉ら（2006）は「学習を効率的に進めたり学習の成果を高めたりするにはテキストを活用することが求められるが，必ずしも十分な取組をしている学校が多いとは言えない」と述べている。つまり，このような中で PISA 型「読解力」育成するためには，子どもたちにわかり易いテキストを提供し，理解の向上を図り，知識や経験と関連付けて，自分の考えを表現できる力を高めていくことが重要である（渡邉ら，2006）と指摘する。また，国語以外での各教科や総合的な学習の時間等においても PISA 型「読解力」の育成が求められていることから，体育科における実践的な検証も必要になってくる。

2．研究の目的

そこで本研究は，体育科における PISA 型「読解力」の育成に向けた，体育授業の研究動向ならびにその具体的方策について検討することを目的とする。

そのために，以下の２つの方向性から論及を進めていくこととする。まず，近年の PISA 型「読解力」に取り込んでいる体育授業の実践例を参考にして，その具体的な内容や方法を整理する。次に，その整理した内容から，体育授業で育成できる PISA 型「読解力」を検討し，今後のわが国における体育授業の PISA 型「読解力」の育成の方向性を探る。

３．体育科における PISA 型「読解力」の動向とその方策事例

3.1. 体育科における PISA 型「読解力」の動向

先述した「読解力向上に関する指導資料」（文部科学省，2005b）には「２ 読解力を高める指導例」に，以下のア（ア）～ウ（イ）までの７つの指導のねらいが明記されている。

ア．テキストを理解・評価しながら読む力を高めること
（ア）目的に応じて理解し，解釈する能力の育成
（イ）評価しながら読む能力の育成
（ウ）課題に即応した読む能力の育成
イ．テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること
（ア）テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成
（イ）日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成
ウ．様々な文章や資料を読む機会や，自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること
（ア）多様なテキストを対応した読む能力の育成
（イ）自分の感じたことや考えたことを簡潔に表現する能力の育成

では，ア，イ，ウそれぞれの指導のねらいについて，体育科における体育的側面と保健的側面から述べていく。

まず「ア．テキストを理解・評価しながら読む力を高めることについては，例えば，バスケットボールにおいてゲームスコアから相手チームの得点パターンや弱点，自己のチームと比較して優れている点や劣っている点などを確認し，改善点を探したり，練習計画を作成できるようにすることが求められると考える。

次に「イ．テキストに基づいて自分の考えを『書く力』を高めること」については，教師から提示された資料やビデオ画像を自分や友達の運動と関連付けて書くことやアドバイスなどができることだと考えられる。

最後に「ウ．様々な文章や資料を読む機会や，自分の意見を述べたり書いたりする機会を充実すること」については，例えば，保健の授業で健康と運動の関連について学んだとする。そこで，健康を維持するのに適度な運動とはどのような運動があるのか，どのぐらいの運動強度が良いのかということについて，新聞や雑誌，教科書などから情報を読み取り，体育の「体つくり運動」や「体育理論」などの領域とリンクしながら考えさせることや感想などを記述できるようにすることだと考えられる。

一方，田中博之（2008）は，「言葉の力」を育てる教育メソッドとして20個の項目を挙げており，その項目を「理論的に思考したり，表現する力」,「人間関係を豊かにする力」,「イメージ感性を豊かに創造する力」,「実践や行動につなげる力」,「自分を励まし創る力」,「言葉とその使い方を評価する力」の６つに分類し，それぞれの領域で具体的なメソッドとそれを育成可能な教科を提案している。

すなわち，この提案した「言葉の力」は各教科における PISA 型「読解力」のとらえ方をもっと具体的に示すことができていると考えられる。

そこでは体育科で育てることが可能と思われる領域については以下の３点を挙げている。１つ目は「自分を励まし創る力」の領域である項目の「自信をつける」。残り２つは「人間関係を豊かにする力」の領域にある項目「４．よさを認める」,「８．合意を形成する」である。この３つの領域や項目は，体育授業で，グループ活動の成果の話し合いや作戦会議，友達同士の関わりなどと関係しており，体育という教科で育成できる特有の側面を持っていると考えられる。

3.2. 体育授業における PISA 型「読解力」の授業実践例とその概要の検討

PISA 型「読解力」の向上における体育授業の取り組みについては表１のようにまとめることができる。

まず，横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校（以下,「附属横浜中学校」と略記）の末岡洋一（2006）の取り組みでは，自分の感じたことや考えたことを表現できる能力を育成することを目的とし，「体つくり運動」の領域において運動の必要性についての理解だけでなく，保健分野と体育分野との関わり中で効果的な運動実践について考えさせる実践を行っている。また，様々な角度から運動を理解したり，解釈することができる力の育成を目指し，「陸上競技」領域の走り幅跳びと走り高跳びについての実践を行った。そして，２つの種目の比較や分析をしていく過程で，課題を発掘したり問題を解決させ，さらに「技能」の向上を図った。

次に平野真（2007）は，先述した「読解力向上に関

表１　PISA 型「読解力」を高める体育科の実践のまとめ

授業者	指導のねらい	指導と展開の際
末岡洋一（2006）（附属横浜中学校の取り組み）	（1）自己や仲間の心身の健康について気を配ることの意味を考える力 （2）課題を設定がされた上で，互いに協力して計画的に運動することが，どのように集団行動や一人一人の社会態度に生かすことができるのかを考える力。	**「体つくり運動」領域と保健分野とのリンクから心身の健康や効果的に運動実践について考える** （1）体ほぐし運動のねらいに照らし合わせ，体へ気付き，将来に向けて体と心を育てるためにどうすればよいか考えさせる。 （2）「体の調整」では，心と体の密接な関係を理解した上で，運動の効果を実感し，日常生活に取り入れるための方策を考えさせる。さらに，発表会で表現する力を育てる。 （3）「仲間との交流」では様々な体験で，心の緊張や，適切の予測と判断について感じたり，考えたりする。また，自ら仲間とのかかわる力を育てる。
	様々な焦点から運動（スポーツ）を理解したり，解釈することができる力。それを統合することでさらに「技能」向上しようとする力。	**「陸上競技」領域の走り幅跳び・走り高跳びを高並列にとらえたり，比較して考える** （1）それぞれの種目の特性を考えることに焦点化して，それぞれの「競技スタイルの変遷を知る」を取り上げる。 （2）かかわりつながる点や比較することに焦点化して，「比較観察する」ことを取りあげる。 （3）非連続テキスト型テキストを利用ながら，ひとつにまとまった「技能」を分析することから考える力を育成することができる。 （4）「自己分析・問題発堀」は，ゲームでの動きやフォームを記録したＶＴＲや連続写真などのテキストを分析することで問題を発堀することである。
平野真（2006）（東北大学大学院情報科学研究科）	（1）体育授業を進める上で必要な知識を身に付けて PISA 型「読解力」向上の手立ての一つとして体育テキストを作成する。 （2）PISA 型「読解力」の向上につながるようにテキストの読み取りを指導する。	**PISA 型「読解力」の向上を目指した体育授業の構造** （1）テキストへの感想の記入 感想の記入を毎時間行う。主に，チームの作戦，自分の役割，役割を果たせたどうかなどついて振り返り，その後，楽しさや，次の時間の課題などをまとめる。振り返りの書き方については，カードの回収後に個人的に指導する。 （2）テキストの読み取り まず，テキストに貼り付けた資料をよく読み，自分の活動に必要な情報を取り出すようにする。例えば，教室で行う水泳の学習の約束を例にとる。どんな約束をするのかを，子達はテキストを読んで知る。また，大事なところに線を引かせる。そして，なぜ，その約束があるのか，なぜ守らなければならないのかを理解できるようにする。 （3）テキストの精選 子どもに与えるテキストはどのようなものがよいかのだろうか。体育授業における PISA 型「読解力」の向上は，そのために考えたテキストによって育てるのでなく，これまで，日常的に活用してきた学習カード，資料をもとに，読解力プロセスを意識してアプローチしていくことを考えた。
渡邊彰（2006）（文部科学省スポーツ・青少年局体育官）	お話を動きに変える	**お話を動きに変える―三年生「表現運動」の実践から** （1）本を読み，ビデオを見る。 （2）文章，挿絵，などから表したいイメージを端的にカードに書き込む。 （3）皆のイメージを集めてたくさん書き込んだ「全体のイメージ」をつくる。 **読解力のポイントとして** ・題材に関する本を読んだりビデオを見たりして冒険の具体的イメージを膨らませること。 ・表したイメージを経験や知識と関連付けながら端的にカードに書き込んだり体全体を使って表すこと。 ・気に入った踊りを見合って表したものや良かったところを仲間と指摘し合うこと。 ・冒険日記として一番楽しかったことを書き，感想文集を読み合うことなどである。
有賀直美（2008）（山梨県笛吹市立浅川中学校教諭）	課題に対する自分の実状状況を評価し，自分に適した課題を設定し，課題解決のための取組方法を考え，表現する力を育成する	**学習カードを使って考える力を育てる保健体育科の授業づくり** 主な学習内容 ・学習カードの書き方の理解 ・課題に対する自分の実現状況の評価 ・自分の適した課題の設定 ・課題解決の取組方法を考え表現する ・スムーズで力強い動きの習得 ・学習して分かったことを書く

する指導資料」（文部科学省b）における「２ 読解力を高める指導例」の「（１）指導のねらい」にある「イ．テキストに基づいて自分の考えを『書く力』を高めること」で提示されている内容に近い実践を行っている。まず，自分の感想を書くためにテキストや本，ビデオなどから情報を読み取る「テキストの読み取り」や自分の活動に必要な情報を取り出すようにする「テキストの精選」を通してPISA型「読解力」の向上を図っている。つまり，７つのねらいのイ（ア）「テキストを利用して自分の考えを表現する能力の育成」とイ（イ）「日常的・実用的な言語活動に生かす能力の育成」に当てはまると考えられる。

また，渡邊彰（2006）は小学校３年生の「表現運動」の授業でいろいろなイメージを取り，自分のイメージを表現できることをねらっている。そのために，最初，資料，ビデオを見ること，次に，文章，挿絵にイメージを書き込むことで，「全体のイメージ」を膨らませることである。これは，７つのねらいのウ（ア）「多様なテキストに即応した読む能力」とウ（イ）「自分の感じたことを簡潔に表現する能力」をねらっていると考えられる。

有賀直美（2008）は，自分の状況の判断した上，「課題設定」して，「課題解決」への取組を強調している。そのために，毎回の授業を受けた後「学習カード・ノート」の記入が行う。この「学習カード・ノート」の変化から自分の状況を把握できるようにしている。その後，自分に適した課題を設定し，課題解決の能力を育成させようとしている。

以上から，４つの体育授業の実践事例の特徴を以下の４点にまとめることができる。

①運動領域と保健分野をリンクしながら体への気付きを高める。
②運動の中で類似した種目を比較し，観察する能力を高める。
③「学習カード・ノート」の記入，テキストの読み取りとテキストの作成。
④課題を設定し，課題解決のための取組方法を考え，表現する力を育成する。

つまり，「学習カード・ノート」の利用，課題解決学習，比較観察するタイプの授業が読解力高めていく可能性があると考える。

４．結果と考察

表２は，前節の体育授業におけるPISA型「読解力」の実践事例が「７つの指導のねらい」のどのPISA型「読解力」に焦点化したのかを表にまとめたものである。

表２　７つの指導のねらいをもとにした評価

７つのねらい		末岡（2006）	平野（2007）	有賀（2008）	渡邊ら（2006）
ア	(ア)目的に応じて理解し，解釈する能力				
	(イ)評価しながら読む能力				
	(ウ)課題に即応した読む能力	●			
イ	(ア)テキストを利用して自分の考えを表現する能力		○		
	(イ)日常実用的な言語活動に生かす能力		○		
ウ	(ア)多様なテキストに即応した読む能力	○			○
	(イ)自分の感じたことを簡潔に表現する能力	○		○	○

注）①渡邊ら（2008）における授業実践者は，横山教諭である。
②●は，ねらいを設定しているのみで，実際の授業実践は実施していない。

表１からわかるように取り組んでいる学校と実践が少なく，まとめた実践を「７つの指導ねらい」で評価すると，ウ（ア）の「多様なテキストに即応した読む能力の育成」とウ（イ）「自分の感じたことを簡潔に表現する能力」という２つの目標をねらった授業実践に焦点化されている傾向が窺える。ただし，ア（ウ）の「課題に即応した読む能力」は，ねらいとして設定しているものの実際には授業実践が実施されなかった項目である。体育科においては，アの「テキストを理解・評価しながら読む力を高めること」やイの「テキストに基づいて自分の考えを書く力を高めること」のPISA型「読解力」の育成が困難な点が多いことが推測される。しかしながら，「読解力向上に関する指導資料」の「２ 読解力を高める指導例」では，イ（ア）の具体的な例に保健体育として「悩みの相談の事例テキストを読み，アドバイスについて話し合って記述する」ことが求められている。すなわち，体育授業と保健授業を融合した形式での実践事例の取り組みが求められていると思われる。

他方，PISA型「読解力」の授業実践の方法論を考察していくと，各実践において，「体育テキスト」の

読み取り，あるいは「学習カード・ノート」の記入などが中心になっている傾向にある。体育授業でもPISA 型「読解力」の育成する上で「学習カード・ノート」などの記入が有効な手段であることが示唆される。さらに，PISA 調査で用いられたテキストは，文学的文章や説明的文章などの「連続型テキスト」だけでなく，図・グラフ・表などの「非連続テキスト」も含まれている。したがって，体育の単元によっては自己の身体や技術・技能の変化を図やグラフにできそれを分析し記述することそのものがPISA 型「読解力」の一助になり得る。しかも，体育理論の領域と並行して学習させることがより効果があると思われる。しかしながら，これに対応した記述内容の評価規準の策定やルーブリック（採点指針）の検討が必要不可欠になる。

池野（2006）は「確かに，PISA 調査の読解力は，向上性の構成要素をもち，一人一人の子どもの成長する構造を方略としてもった新しい学力・評価論を提起した。しかし，その方略の展開は十分ではない。とりわけ，まとまりとしてのリテラシーというものを具体的に進める方向と方策を開発していないことが問題であると指摘している。まとまりを示す方法としては，パースペクティヴ（見方・考え方）の構築があるが，この方略とそれに基づいた評価論が確立していない」とも指摘している。

そこで，この評価規準の策定やルーブリック（採点指針）点に関して，平成20年度の学習指導要領の改訂に伴って，指導内容が「学び方」から「知識，思考・判断」にシフトした傾向を鑑みて，各学校の授業実践の蓄積が期待されるところである。

5．まとめと今後の課題

本研究は，体育科におけるPISA 型「読解力」の育成に向けた，体育授業の動向ならびにその具体的方策について検討することであった。その検討結果としては，以下３点のように要約できる。

①体育授業において，ウ（ア）の「多様なテキストに即応した読む能力の育成」と，ウ（イ）「自分の感じたことを簡潔に表現する能力」という２つの目標をねらった授業実践に焦点化されている傾向が窺える。そこで，この２つの目標を目指した体育授業でPISA 型「読解力」を高めることに繋がっていく可能性が強いことが推測される。

②体育科においては，ア（ア）の「目的に応じて理解し，解釈する能力」，ア（イ）「評価しながら読む能力」，ア（ウ）の「課題に即応した読む能力」などを目指した実践があまり見られない，PISA 型「読解力」の育成が困難な点が多いあるいは今後の取組が期待されている。

③各実践において，「体育テキスト」の読み取り，あるいは「学習カード・ノート」の記入などが中心になっている傾向にある。体育授業でもPISA 型「読解力」を育成する上で「学習カード・ノート」などの記入が有効な手段であることが示唆されている。しかし，これに対応した記述内容の評価規準の策定やルーブリック（採点指針）の検討が必要不可欠になる。

今後の課題としては，新しい学習指導要領の動きを踏まえ，「学習カード・ノート」，「課題解決」などをはじめ，幅広い授業実践の展開が求められている。同時に，PISA 型「読解力」を高める授業実践の評価基準の充実及び体育科の特徴に即したPISA 型「読解力」の取組が期待されていると考える。

【引用・参考文献】

池野範男（2006）向上主義学力論の特質と問題点，現代教育科学，No.600，pp.18-21.

国立教育政策研究所（2004）『生きるための知識と技能２ OECD 生徒の学習到達調査（PISA）2003年調査国際結果報告書』ぎょうせい，pp.12-24.

岩田　靖（1995）体育授業における「わかる」と「できる」－特に，体育授業における認識的側面の議論について－，日本体育学会第46回大会号：p.129.

OECD，国立教育政策研究所監訳（2004）『PISA2003年調査評価の仕組み』ぎょうせい，pp.7-8.

角屋重樹（2007）問題解決過程の工夫でPISA 型「読解力」の育成を，現代教育科学 No.611，pp.35-37.

小林　篤（1986）『体育授業の原理と実践』，杏林書院，pp.22-32.

小林　茂（2008）今求められる「読解力」とは，『「読解力」で授業をかえる』，ぎょうせい，pp.7-14.

鈴木　健（2006）『クリティカル・シンキングと教育』，世界思想社.

末岡洋一（2006）「体つくり運動」領域と保健分野とのリンクから心身の健康や効果的な運動実践について考える，『「読解力」とは何か　PART Ⅱ－カリキュラム・マネジメントで年間指導計画・学習プロセス重視の指導案』，三省堂，pp.78-79

末岡洋一（2006）「陸上競技」領域の走り幅跳び・走り高跳びを並列にとらえたり，比較して考える，『「読解力」とは何か　PART Ⅱ－カリキュラム・マネジメントで年間指導計画・学習プロセス重視の指導案』三省堂，pp.78-79

高橋健夫（2002）『体育の授業を創る』大修館書店，pp.129-142.

竹田清彦ら（1997）『体育科教育づくりの探求』，大修館書店，pp.130.

田中孝一（2006）PISA 型「読解力」－義務教育の国際化，現代教育科学，No.600，pp.5-8.

田中孝一・小林　茂（2008）『「読解力」で授業をかえる』，ぎょうせい，pp.159-162.

田中耕治・西岡加名恵（2008）『「学力向上」実践レポート』，教育開発研究所，pp.94-95.

田中博之（2008）BIRD，pp.8-11.

文部科学省（2008）『中学校学習指導要領解説保健体育編』http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/new-cs/youryou/chukaisetsu/index.htm

文部科学省（2005a）『読解力向上プログラム』http://www.mest.go.jp/a-menu/shotou/gakuryoku/shiryo/05122201/014/005.htm.

文部科学省（2005b）『読解力向上に関する指導資料－ PISA（読解力）の結果分析と改善方向（要旨）－』http://www.mest.go.jp/a-menu/shotou/gakuryoku/shiryo/05122201.htm.

平野　真（2007）PISA 型「読解力」の向上を目指した体育授業の構想，日本教科教育学会第33大会発表論文集：pp.155-156.

文部科学省教育課程課・幼児教育課編（2006）「初等教育資料（810）」東洋館出版社，pp.10-17.

文部科学省（2008）学校教育法施行規則の一部を改正する省令の制定並び幼稚園教育要領の全部を改正する告示，小学校学習指導要領の全部を改正する告示並び中学校学習指導要領の全部を改正する告示について（通知）.

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校 FY プロジェクト編（2007）『「読解力」とは何か Part Ⅲ－ PISA 調査における「読解力」を核としたカリキュラム・マネジメント』三省堂，pp.74-79.

横浜国立大学教育人間科学部附属横浜中学校（2007）『「読解力」とは何か　PART Ⅱ－カリキュラム・マネジメントで年間指導計画・学習プロセス重視の指導案』三省堂.

渡邊　彰・戸田芳雄（2006）体育授業における読解力の育成，『初等教育資料（810）』東洋館出版社，pp.10-17.